『三年一組春野先生』を読んで

四年　女子

わたしは、この本の表紙がとてもすてきだったこと、ふき出しに書いてあった、三週間だけのミラクルティーチャーという言葉を見て、この本にきょう味がわきました。

交通事こにあったたんにんの先生の代わりに、ミラクルティーチャーこと春野先生が三年一組にやってきました。三週間という短い期間でありながら、春野先生が子ども達の良いところを見つけ、成長にみちびき、子ども達のために、一生けん命行動する物語です。

わたしは、この本で印しょうに残っている場面が二つあります。

一つ目は、よい子の石です。よい子の石とは、自分から進んでよいことができたときやがんばったときに、自分のペットボトルに白い石を入れることができます。友達のよい所を見つけたときは、その友達のペットボトルと、それに気づいた自分のペットボトルに石を入れることができます。ペットボトルに入っている石が多くなればなるほどよい子にな

20 × 20

れるというゲームです。

中田俊輔くんは、先生がきらいです。テストでは不真面目なたい度を取り、よい子の石をすてようとする問題児です。しかし、春野先生は、中田くんをおこることなく、がんばれる方法を考え、よい子の石をわたせるようにしました。春野先生によって、中田くんの気持ちが変化しました。春野先生の

「進んでいいことができるってこともすばらしいけれど、友達のいい所に気がつくってことも大切なの。」

という言葉がありました。わたしは、人と話すのが苦手です。だから、自分からよいことはできるけれど、友達のよい所は、友達と関わって、しっかりと見ていないと気がつけないので、むずかしいと思いました。しかし、自分から積極的に話しかけて、その人のよい所を見つけようと思いました。

二つ目は、ミラクルシュートを決めた場面です。三年生がサッカーゴールを使える日な

のに、六年生がルールを守らず使っていました。それにおこった春野先生が、六年生とサッカーの勝負をし、ドリブルで六年生全員をぬいて、オーバーヘッドキックを決めました。そんな春野先生のすがたにおどろく三年生に、「できるようになるまで、あきらめないで練習すること。あきらめちゃダメ。できるまでやろうとすることが大切。あきらめずに努力を続けていれば、それはできるようになるとちゅうなの。」と春野先生が言いました。この言葉を読んで、わたしも習い事がうまくいかずやめたくなったり、勉強がむずかしくてあきらめようとしてしまったりすることがあります。春野先生の言葉で、あきらめずにがんばって、努力を続けることが大切だと心にひびきました。春野先生の言葉は、今のわたしをおうえんしてくれるような感じでした。

今後、目の前に大きなかべが立ちはだかっても、あきらめずにがんばりたいです。

20 × 20